

編集余録

「だーれもない幸福の駅で♪」。軽やかなメロディーと心温まる歌詞が今も耳に残る。曲名は「チロンヌップ」。十勝にもゆかりの深い作曲家菅野政義さん（埼玉）が、まだ廃止前の国鉄広尾線愛国・幸福両駅を訪れた時の感動をつづり、1985年にレコード化した▼NHKのテレビ番組（73年）が火付け役となり、「愛の国から幸福へ」のキャッチフレーズで一大ブームを巻き起こした両駅。鉄道廃止（87年）が決まり、この資源を生かそうとさまざまな運動、構想が相次いだのも80年代の半ばだった▼同区間の観光再開発を目指す地元の経済人らが新会社を立ち上げ、愛国駅前の三角地帯にピラミッド型の多目的ホールを建設。俳優津川雅彦さんも「幸福鉄道」として鉄道再生構想を打ち上げた。次々と湧き起こるうねりに、担当記者として気の抜けない日々が続いた▼多目的ホールの閉鎖などいずれも道半ばに終わったが、十勝の観光を考える上で両駅の存在がいかに大きく、インパクトあるものか。一連の動きはそのことを強烈に印象付けた▼両駅はその後、2008年に「恋人の聖地」に。特に幸福駅は市の再整備事業も経て観光名所としての歩みを続け、11月で開設60周年を迎えた。地味ながら一時のブームに終わらなかつた芯の強さ。人々がこの地に寄せた「物語」の集積を改めて思う。

（金谷信）